

「主の弟子となる」ルカ 10：1-12 木村一充牧師

10月になりました。暑い夏が去り、朝夕はだいぶ涼しくなって、秋の気配を感じるようになりました。今年の夏は記録的な猛暑に見舞われ、一部の地方では水不足が問題になりましたが、お米の出来具合は例年とほぼ同じだといえます。ただ、全国的に作付面積を増やした農家が多かったこともあり、農水省の発表では昨年より56万トンほど出来高が増える見込みだといえます（対昨年比107%程度）。毎年秋になると、私は教団讃美歌の504番を思い起こします。「実れる田の面は見渡す限り、穂波の立ちつつ、日影に匂う。垂り穂は色づき敏鎌を待てり。いざいざ駆らずや。時過ぎぬまに」讃美歌を歌う会でもこの歌を歌ったことがありましたが、刈り入れの時期にまことにふさわしい賛美です。そのような収穫の秋にちなんで、本日はルカによる福音書の10章1節以下からみ言葉に聞きたいと思います。主イエスが、12弟子とは別に72人を選んで、ユダヤの村々に派遣するところです。

この少し前に、イエスの一行はサマリア人の村に入り、福音を伝えようとしていました。しかし、使いの者の報告によると、サマリア人たちはイエスを歓迎しなかったと書かれています（9章53節）。ユダヤ人はサマリア人を嫌い、長い間この民と交際をしませんでした。そのこともあったのでしょう。イエスの一行はサマリア人たちから冷たい扱いをされたのであります。伝道には困難が伴うということが、このことから窺い知れます。続く10章で、一行はふたたびユダヤ人の村に入ります。このとき、主イエスは72人を選んで、ご自分が行く予定にしていたすべての町や村に、二人一組で、先に遣わされました。この72という数字は、ほかの写本では70になっているものがあります。72にせよ、70にせよこの数字は、当時の全世界の民族の数を表していると言われます。だとすると、この時の72人はイエスによって任命された最初の宣教師だったということになります。彼らは、二人ずつ一組になって伝道しました。今日でも、この聖書の記事に従って、二人一組で伝道活動をしている教派があります。私が学生の頃、よく自転車に乗った二人の外国人の若い男性たちが、移動している場面に出くわしました。二人ともたいへんなイケメンで、一目で「負けた」と思ったものですが、この人たちもキリスト教のある教派に属している人たちと見られています。なぜ二人なのか。それは、二人のうちのどちらかが伝道の困難さのゆえに落ち込んだときに、もう一方がこれを助け起こす働きをするためでした。私も妻にさまざまな点で助けてもらっています。ですから、主イエスがここで二人ずつ一組にして、彼らを伝道の前線に送り込まれたという記事を読んで、主イエスが伝道の働きの大変さをよく分かっておられるなど感じるのであります。

そこで、派遣に当たっての言葉を発せられます。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に関心なさい」今、私は、私たちの教会に子どもたちを呼び込むための手立てを考えています。家内と食事しながら、しばしばそのことを話題にしています。ある教会では、学童保育の会場として教会の一階部分を提供しています（稔台福音ルーテル教会）。子ども食堂を開いて、地域の子どもたちを呼び、カレーを作って一緒に食べている教会もあります。栗ヶ沢教会でも、なにか子どもを教会に招くきっかけが作れないものだろうかと思案しています。その際に、ネックになることが奉仕者の問題です。しかし、できない理由をあげていても仕方ありません。イエス様は「だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に関心なさい」と今日の箇所でおっしゃっています。お言葉どおり、子どもたちを呼び込むために、一所懸命祈るところから始めたいのです。さらに続けて、イエスは言われます。「行きなさい。わたしはあなたを遣わす。それは、狼の群れに小羊を送り込むようなものだ」大事に育てた子どもや教え子を世に送り出そうとする時、思い起こす聖書の言葉です。親のひざもとにある時は安全です。何か困難なことが起きても、すぐに手を差し伸べ保護することができる。そのように、心を込めて育てた小羊を、狼の群れの中に解き放つような羊飼いはどこにもいません。考えられない話です。しかし、主は弟子たちを伝道の最前線に送り込む時、その考えられない冒険をしなければならないと言われます。このような小羊たちの働き、献身なくして神の国の建設というみ業は成り立たないのです。

しかも、この小羊は財布も袋も履物も持たず、まさに裸一貫で伝道の最前線へと送り込まれます。まさに、神さま以外に頼るものがないというあり様です。私は大学を卒業して、西南学院神学部へ入学す

る時に、引越しをクロネコヤマトの宅急便に頼みました。あの宅急便の軽トラック一台に自分の部屋の中にあった荷物をすべて積み込むことが出来た。しかも、引越しの費用も驚くほど安く済ませました。安すぎて、代金を忘れてしまいました…。荷物が福岡の神学部独身寮に届いた時、先輩の神学生が荷下ろしを手伝ってくれましたが、あまりにも積み荷が少ないことに驚いていました。私の神学生としての生活は、実に身軽で何も持たないところから始まったのです。それでも、物が少なく困ったことはありませんでした。

さて、こうして伝道の最前線に送り込まれた弟子たちが、主イエスの言葉に従って、行く先で出会った人々に何を行ったのでしょうか。大きく三つあります。その第一はみ言葉を語ったことです。神の国のことを話しました。「神の国は近づいた」と人々に語ったのです。それと同時に、病人の癒しの業をおこないました。病で苦しんでいる人を、その苦しみから解放したのです。それは、主イエスがガリラヤで伝道を始めたときになさったことと同じことでした。神の国の福音を語った弟子たちは、語るだけでなく病気で苦しんでいる人を助けました。それは、救いが魂の問題だけにとどまらず、肉体と魂の両方に関わることであったことを示しています。今日の教会もこれと同じです。もしも、お腹をすかしている人がいれば、何か食べるものを出して差し上げる。さみしい人がいたら、その人のそばにより、話し相手となって、孤独から解放してあげる。重い荷物を抱えていれば、その重荷を一緒に負う。そのように、何か困っている人がいたら、何でもいい。自分たちにできる小さなよきことをして、その人の助けとなるような教会でありたいと思うのです。

第二に弟子たちがしたことは、祈ることでした。どこかの家に入ったら、まず「この家に平和があるように」と祈りなさいと、イエスは言われます。「平和があるように祈る」とはどういうことでしょうか。平和という言葉は、もともとはヘブライ語のシャロームから来ています。そのギリシャ語を訳した言葉です。しかし、シャロームというヘブライ語は、単純に「平和」という言葉では覆い尽くせない広がりを持つ言葉です。つまり、単に平和であること、無事であること以上に、個人の生命や社会全体が生き活きと活気づいていること、生命が満ち溢れ、個人にせよ社会にせよ、幸せになるためのすべての条件が満たされている状態を指す言葉、それがシャロームであり、弟子たちがここで祈った「平和があるように」とは、そのような満ち満ちた命の充満がありますように、という祈りでありました。単純に言えば、訪れた家ごとに、その家族の幸せを祈ったのです。教会の祈りは、その意味において一人一人に寄り添い、その人の問題の解決を願う、幸せがあるようにとの祈りです。ある教会では、礼拝のなかで出席者の方が立ち上がり、隣近所の方と「主の平和」と唱えて握手する時間を持つといいます。シャロームを祈る祈りを私たちの教会も、常に、絶えず祈り続けたいと思うのです。

三番目に弟子たちがしたこと、それは彼らが泊めてくれた主人の家の生活の中に飛び込み、それを受け入れたということです。週報の巻頭言にも書きましたが、当時のユダヤの社会では神の国の福音を語り伝える伝道者に、宿を提供してその活動をささえてくれる人がいました。「旅人をもてなす」というユダヤの古き良き慣習を引き継ぎ、食事を出してその伝道者の旅をバックアップしたのです。このあと、10章の最後の方でマルタとマリアの姉妹の話が出てきますが、彼女たちもまたそのような支援者の一人でした。その際に大切なことは、宿を提供してくれた宿泊先で、食卓に並べられた食事をきちんと食べるということです。イエスの弟子たちはそれをしたのです。どのような食事でも感謝しておいしく頂く、これはとても大切な事柄でした。宿を提供してくれた人の厚意に感謝し、食卓に並んだ食事をすべて感謝して頂いたのです。伝道者が、その家族に受け入れられるために、食べ物への感謝があったのです。このことは現代の私たちにも言えることです。教会でも、一緒に食べる機会がしばしばあります。そのときに、どのようなメニューであれ、作ってくれた人への感謝の思いをもって食事の時間を感謝の時としましょう。神の国は、ともにパンを分かち合う食卓の中に来ます。このあと、主の晩餐式を行います。最初の伝道者たちが招かれた家での食事を心から感謝して食べたように、私たちも日々の食卓の恵みを大事にしたいと思うのであります。

お祈りいたします。